

県内スギ・ヒノキ雄花の着花量調査について

○ スギ雄花の着花量調査

スギは、2月から4月にかけて花粉を多く飛散させますが、花粉を飛散する雄花は、前年の7月から10月にかけて形成されます。スギの雄花は11月中旬頃になると黄色味を帯び針葉の緑色と区別しやすくなるため、この時期に調査を行います。調査方法は、林野庁が定めたものです。

本県では、この調査を平成9年度から実施し、平成13年度から林野庁の調査事業として実施しています。昨年の発表まで30箇所の結果による発表でしたが、54箇所に拡充した調査結果に変更しました。そのため、前年値、平均値等が前年発表と変わっています。

今回の結果は、県内全体では着花点数が昨年の60.2点より減少しましたが25年間の平均42.2点を上回り、過去7番目に高い値となりました(記者発表資料図1)。地域別の着花点数は、県西部が53.6点とやや低いものの地域的な差は比較的少なくなっています(図1)。

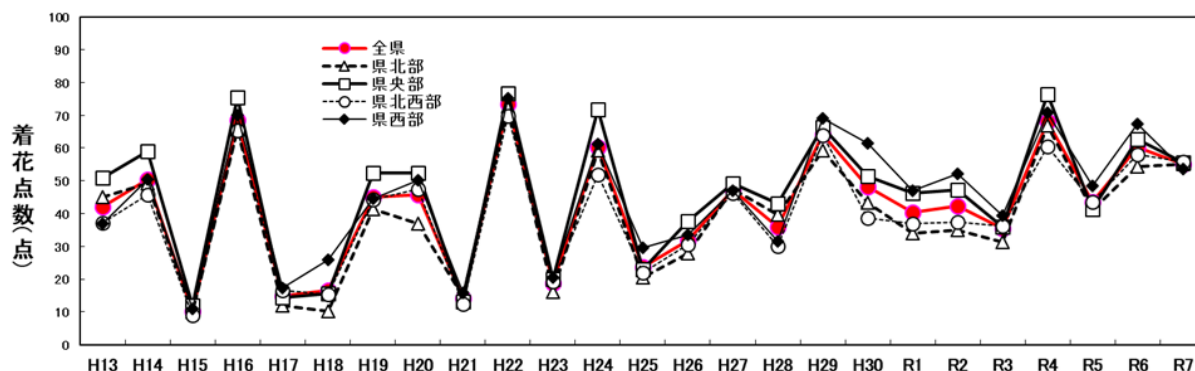


図1 スギ地域別の着花点数の年変化

令和7年は平均 54.9 点、県北部 55.1 点、県中部 55.5 点、県北西部 55.8 点、県西部 53.6 点

○ ヒノキ雄花の着花量調査

ヒノキはスギ同様に花粉症の原因植物で、花粉はスギよりもやや遅い3月から4月にかけて飛散し、スギ花粉症患者の7～8割がヒノキ花粉にも陽性反応を示します(注 *文末参照)。花粉症対策としてヒノキ花粉飛散量も予測する必要性が生じています。

このため、自然環境保全センターでは平成24年度から林野庁の調査事業として、飛散量の目安となるヒノキの雄花の着花量の調査を行っています。今回発表した着花量調査による花粉飛散の推定方法は、調査事業で検証中のものです。ヒノキ雄花は5mm程度(記者発表資料写真参照)で、スギに比べ極めて小さいことから、調査は雄花が判断できる12月以降に行い、見通しのよいヒノキ林(記者発表資料写真参照)を調査林に選び、同じ個体を調査することで年次間の比較を行えるように実施しています。

今回の結果は、着花点数が昨年を上回り、調査を始めてから14年間の平均も上回りました(記者発表資料図2)。地域ごとの差は、県央湘南部がやや低いものの全体として差はわずかでした(図2)。

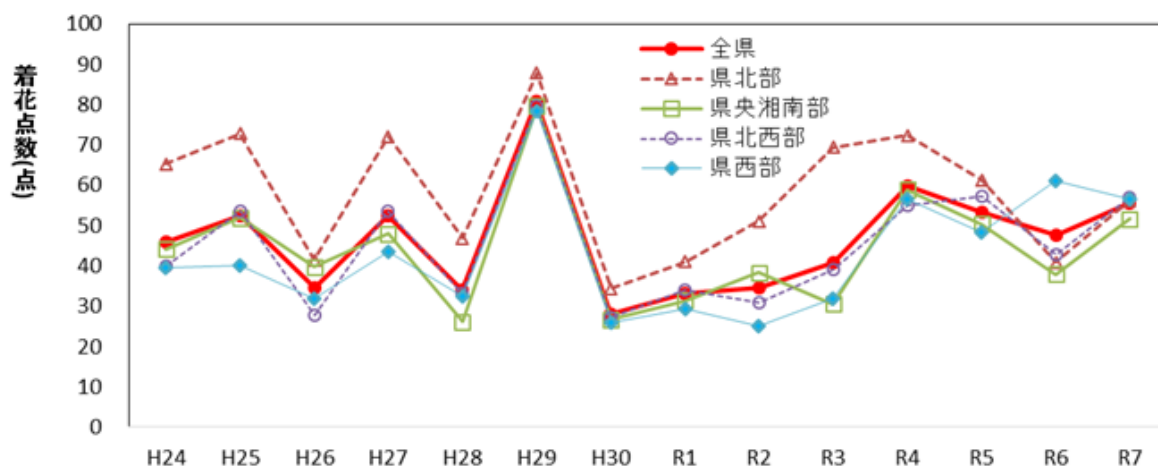


図2 ヒノキ地域別の着花点数の年変化

令和7年は平均 55.4 点、県北部 56.1 点、県央湘南部 51.7 点、県北西部 56.9 点、県西部 56.5 点

○ スギ・ヒノキ雄花の花芽形成と気象との関係

一般にスギ・ヒノキ雄花の花芽形成は、花粉が飛散する前年の夏(7月・8月)の気象条件との相関が高いとされています。高温少雨で、日照時間が長い気象条件であると花芽形成が促進され、雄花が多く形成される傾向がみられます。

令和7年夏の気象(横浜地方気象台海老名観測所)を見ますと、7月・8月の日照時間は平年比 149%と大幅に高く、平均気温は 110%と記録的な猛暑でした。これまでは、着花点数は、7月・8月の日照時間と相関がみられていました。

今回のスギ調査結果は、図3のとおり回帰直線よりも低い値になりました。猛暑ではあったものの、前年に雄花が大量に着花したことから、今年はやや減少したと推定されます。

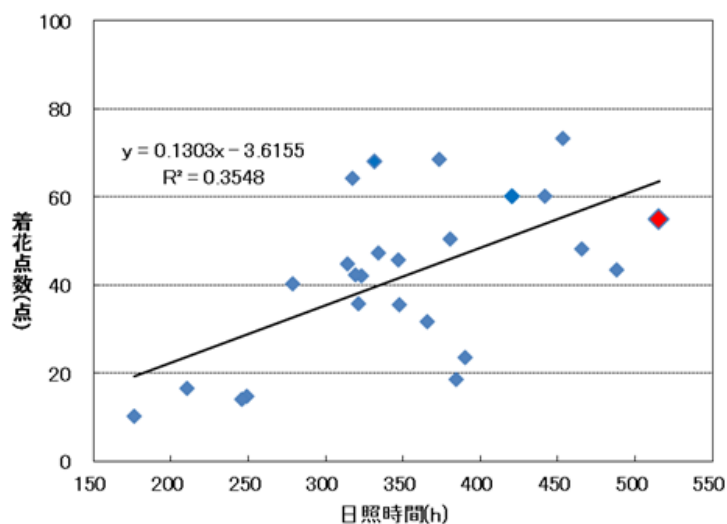


図3 7月・8月の日照時間とスギ着花点数の関係

日照時間は横浜地方気象台海老名観測所、赤点が令和7年

一方ヒノキでも同様に高温少雨で日照時間が長い気象条件で花芽形成が促進され、雄花が多く着く傾向があります。しかし、ここ数年は暑い夏が続いていることもあって、この関係性が見られなくなっています(図4)。このため気象要因による雄花量の傾向の把握が難しくなっています。今年は7月・8月が猛暑で日照時間が平年比 149%と高かったものの、前

年も例年並みに着花していたため、結果的に大幅には増加せずやや多い着花になったと推定されます。

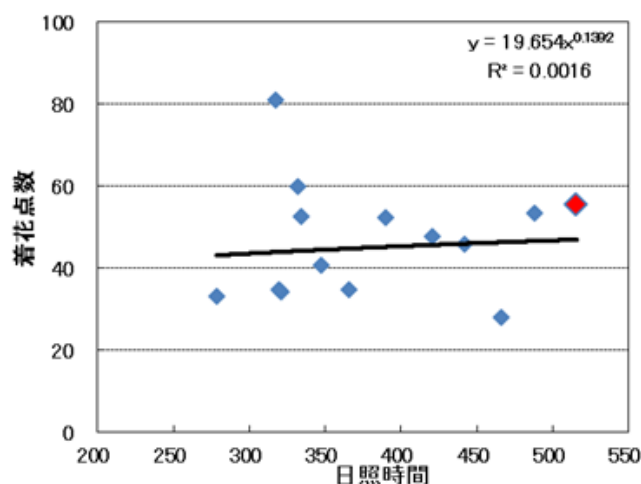


図4 7月・8月の日照時間とヒノキ着花点数の関係

日照時間は横浜地方気象台海老名観測所、赤点が令和7年

○ 花粉飛散量の計測と令和8年春の花粉飛散量の予想

当センターでは、雄花の着花調査以外に、平成 13 年度から当センター施設内のスギ・ヒノキ林において花粉飛散量を計測しています。

スギ林内の花粉飛散量と 54 箇所での雄花の着花点数の間には図5に示したとおり高い相関関係がみられることから、着花点数を調べることにより花粉飛散量の予測が可能となります。花粉飛散量は例年値から増加する(この林で 26,000 個/cm²程度)と予想されます。

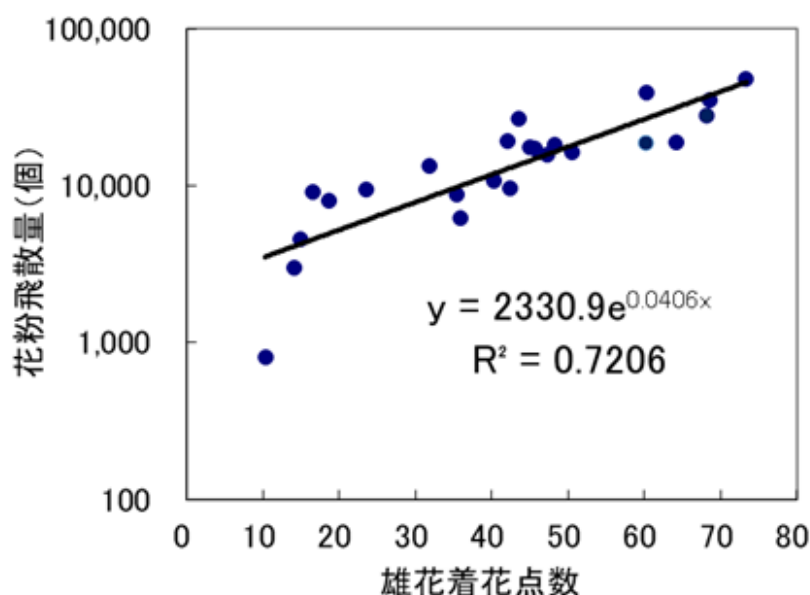


図5 スギ雄花着花点数と所内スギ・ヒノキ林のスギ花粉飛散量の関係

ヒノキについても当センター施設内のスギ・ヒノキ林のヒノキ花粉飛散量とヒノキの着花点数は図6のとおり高い相関関係が得られており、花粉飛散量は例年並み(測定した林で 3,200 個/cm²程度)と予想されます。

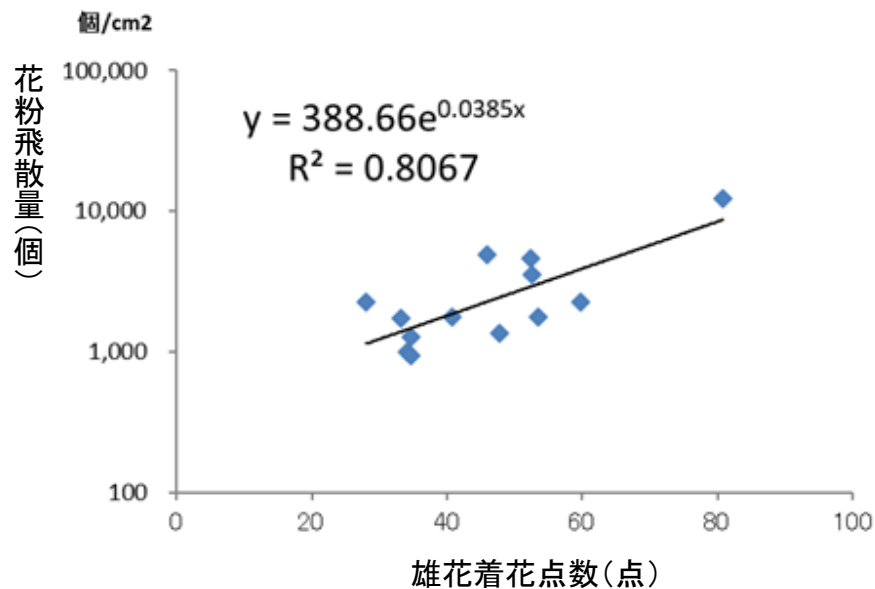


図6 ヒノキ雄花着花点数と所内スギ・ヒノキ林のヒノキ花粉飛散量の関係

平成 20 年度から当センターのホームページでスギ・ヒノキの花粉飛散量を公開しています。令和8年春のスギ・ヒノキの花粉飛散量は、1月以降自然環境保全センター研究連携課のホームページで公開します。

<https://www.agri-kanagawa.jp/sinrinken/12kahun/index.htm>

○ スギ・ヒノキ花粉の飛散時期について

スギ花粉は2月中旬から4月上旬まで、ヒノキ花粉はスギ花粉が終息する3月下旬から4月中旬頃まで、年によってはゴールデンウィーク頃まで飛散します(図7 太線がヒノキ)。

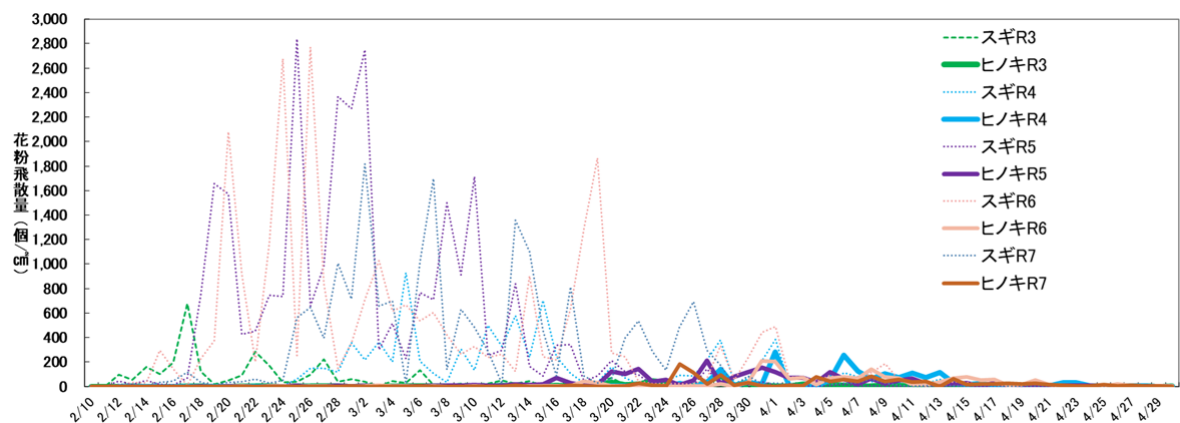


図7 スギ・ヒノキの花粉飛散量の日変化(令和 3 年～令和 7 年)

飛散量は自然環境保全センター所内の調査による。点線がスギ、太線がヒノキを示す。

○ 花粉発生源対策

自然環境保全センターでは、花粉の発生源対策として「花粉の少ないスギ・ヒノキの品種」の選抜と実用化を行っています。現在、県内で生産されているスギ・ヒノキの苗木は、全て「花粉の少ないスギ・ヒノキ」となっています。

さらに、全く花粉を飛散させない「無花粉スギ・ヒノキ」の開発も進めています。無花粉スギは平成22年に実用化し、苗木の出荷を開始しており、令和7年春は約10,000本の苗木を生産しました。無花粉ヒノキは平成24年に神奈川県が全国に先駆けて発見し、令和4年3月に品種登録(神奈川無花粉ヒ1号)を行いました。令和元年5月には神奈川県山林種苗協同組合にさし穂240本を配布して苗木を育成し、愛称を“丹沢 森のミライ”と命名、令和7年春に約1000本を出荷しました(無花粉ヒノキは全国唯一)。

これらの取組が評価され、林野庁の「花粉の少ない森林づくりコンクール2024」で全国林業改良普及協会会長賞を受賞しました(令和6年12月21日)。

*(注) 斎藤洋三・井手武(1994)花粉症の科学、科学同人、京都